

## 李兵衛酒屋の話

山口町船坂

古老の話によれば有馬への途中、船坂村に「李兵衛」という旅人に知られたる居酒屋があったようだ。有馬まで一里、山中過ぎて都の嵐山の景があり、言語にのべがたいと言われて、旅人はこの茶屋で一服するのが常であった。

その「李兵衛」という居酒屋に酒を買いに来るおじいさんがあった。毎晩、山のほうから一升とつくりを下げやってくる。

ある雨のしょぼしょぼ降る夕方、李兵衛じいさんがついて行くと、一升とつくりを下げたおじいさんが途中で狸に変わったではないか。李兵衛じいさんはびっくりして、家に帰るや蒲団をかぶって寝てしまった。そして、おかみさんに「明日、おじいさんが来ても、酒を売るな」と告げた。

翌晩、その狸が酒を買いに来た。「狸にはよう売らん」というと、「酒を飲まんかったら生きていけません。なん

とか酒を飲ませてください。お金は払います」

「木の葉で人をだまそうと思っとるやろ」と李兵衛じいさんがいうと

「いや、これは本物のお金です」

「そしたら、どこから取ってきたんや」

「お地藏さんからもろたんや」

「嘘をいうな。取ってきたんやろ」と李兵衛じいさんがいうと

「いや、ちがう、ほんまにもろたんや。わしは、酒を飲まんかったら命がなくなる。わしの年はな、百八十歳なんや」といったので、李兵衛じいさんはかわいそうになり

「それやったら、売ってやる」というと狸は大変喜んだ。

「しかしなあ、これつきり来るなよ。そのかわりにこの酒ただでやる。樽ごとやる。大きな樽をやるからこれから来てくれるな」

「その樽やったら四日程したらなくなるな」とおじいさん

は悲しそうな顔をして帰って行った。  
それから四日目の朝、李兵衛じいさんが表の戸を開けたら、狸が樽を抱えて死んでおった。李兵衛じいさんは哀れに思い、その狸を懇ろわんごに葬ったという。

